



佐藤教授の自宅で留学生たちと新年会を行った。佐藤教授は、学生の独り立ちを見据え、教員と学生が対等な立場で研究にあたることを心掛けている

モザンビークの沖合には膨大な石油・天然ガスの埋蔵が確認されている。そこで、ホセさんは地質学の観点から、この地域の地史解明と石油地質評価をテーマに修士論文研究を進めている。「モザンビークはエネルギー資源が豊富ですが、産業として見ると未成熟です。大学院の研究室には、石油地質評価などに用いる近代的な設備がそろっているのので、それらの使い方を習得して、母国で生かしたいと思います」とホセさんは意気込む。

ホセさんの指導を担当する佐藤時幸教授は、「留学生の中には、国柄や文化的背景などから、知らないことを知っている」と答えがちで、彼らに最初に教えることは「知らないことは恥ずかしいことではない」ということなんです。だから、彼らに最初に教えることは「知らないことは恥ずかしいことではない」ということなんです。真髓を留学生に伝えている。

留学生と受け入れ大学が共に学び、可能性を切り開く

一方、ホセさんは佐藤教授の指導について「先生はいつも多くの時間を割いて研究のアドバイスをしてくれま。フィールド調査の機会もつくってくれるので、研究室で学んだことを実際の現場で確認でき、理解に役立っています」

資源分野を専門とする教育機関や人材が不足していることを踏まえ、2014年からJICAが始めたのが「資源分野の人材育成プログラム」だ。

途上国から鉱業開発を所管する省庁職員や大学教員、研究者などを日本の修士・博士課程に受け入れ、高度な専門知識を身に付けてもらうこのプログラムは、企業でのインターンシップを含むだけでなく、JICAの資源分野の研修とも連携している。途上国の鉱物資源開発の基盤づくりを支援する

背景には、同大学の歴史がある。国際資源学部と大学院国際資源学研究所は、1910年設立の「秋田鉱山専門学校」を前身としており、資源学の研究と教育について100年の歴史を誇る。資源の探査から開発まで、一貫した教育・研究を行い、学部3年次には全ての学生が、約1カ月間の海外実習を経験する。

秋田大学は既に、東南アジアで資源に関する学術的なネットワークを形成しているが、今回、ホセさんの研究を通じてモザンビークの関連組織と国際学会で研究成果を共同発表するという構想も新たに浮上した。「東南アジア同様、南部アフリカにも共同研究拠点を展開できれば」と佐藤先生は期待を寄せる。

資源の絆プログラムでは、投資呼び込むための投資環境の整備や民間の視点を学ぶべく、夏と春の長期休暇中に短期プログラムを設けている。2週間の夏プログラムの最後に開催した企業との交流会



世界の共通財産 資源開発を担う人材育成

近年、資源獲得競争がますます激しくなりつつある。限りある資源を無駄にしないよう、日常生活を見直すことが大切だ。同時に、国際社会の平和と安定のために

は、世界市場に資源を安定供給できるよう、資源保有国が持続的な資源開発を進めていく必要がある。しかし、多くの開発途上国にとって、独自に資源開発を手掛けるのは容易ではない。地下深くに眠る鉱物資源を見つけ出し、効率的

に掘り出すには、多額の資金と高度な技術が必要だからだ。また、鉱害対策や掘削に関わる法整備なども欠かせない。そこで、日本はハード・ソフトの両面からあらゆるプロジェクトを実施し、途上国の資源開発を後押ししている。さらに、途上国で

資源分野の人材育成プログラム

(資源の絆プログラム)

秋田大学大学院



研究室の仲間と地質の野外調査で秋田県の男鹿半島を訪れた。母国モザンビークでは観察できないさまざまな地質現象の説明を熱心に聞くホセさん



資源という宝を母国の力に

開発途上国の資源開発を担う人材を日本の修士・博士課程に受け入れる「資源の絆プログラム」。留学生に資源分野の専門教育を提供するだけでなく、途上国と日本、受け入れ大学などとの間に双方向の効果が生まれている。



修士論文研究の一環として、母国モザンビークで調査を行った。ENHの倉庫で、石油を掘削した際に地下から採取した岩石試料のサンプリングを行うホセさん(左から2人目)



留学先の秋田県で生まれて初めて雪を見たホセさん。「素晴らしい体験だった!」と声を弾ませる